

『頭とかかと』(創世記 3章 8-24節) 2021.7.4.

<はじめに> 善悪の知識の実を食べた二人の目は開かれました(7)。同時に、今までと違う状況が広がります。それは彼らだけに留まらず、私たち至るまですべての人に影響を及ぼしています。

I 目が開かれて

① 自分を知る(7、10)

人のありのままの姿は、神が造られた祝福そのものでした。しかし目が開かれた彼らにはそれを恥じ入り、直視できません(7)。彼らはどんな思い・考えを抱いたでしょう。それが善悪の知識とどういつながりだったのでしょうか。

② 自分を隠す(10)

恥じ入る彼らは身を覆い隠します(7、8)。何から隠れたのですか。以前はどうしていたでしょう。「裸であるのを恐れて」(10)と隠れた理由を述べています。何を恐れていたのでしょうか。私たちが物事を隠すとき、どんな思いが根底にあるでしょう。

③ 自分を守る(12-13)

人が何をしたのかを神は察知し、問い掛け、応答を求めます。神の問い掛けに人は正直に応答しているのでしょうか。彼らが本当に言いたいことを、代弁してみてください。同じ言葉をあなたも言ったことはありますか。

II 神の宣告

① 蛇に対して(14-15)

神はこの出来事の当事者に宣告を下されます。善悪の判断は神の領分だからです。蛇にはのろいと敵意を与えます。神の創造の計画を覆そうと企て、まんまと成し遂げた神に敵対する者を、神は徹底的に対峙し、やがて彼の頭は打ち砕かれると宣告されます。

② 女に対して(16)

本来神によって祝福された出産(1:28)が、女性にとって苦痛を伴うものとなりました。また、本来男と女は対等であり、お互いを補い助け合う関係でしたが、そこに支配・従属関係が入り込みます。今に至るまで私たちを悩ませている課題です。

③ 人に対して(17-19)

本来、神が造られた園の木から思いのまま食べられた(2:16-17)のに、生きる労苦(17-18)とその結末としての死(19)が決定づけられました。神よりも妻の声に聞き従った代償です。一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、全人類に及びました(ロマ 5:12)

III 神のあわれみ

① 神は呼び掛けられる(9)

人の背信行為を全知の神が気付いていないはずはありません。しかし、あえて常の如く彼らに呼びかけられます。神は人を見限り、諦めてはいないからです。神の御声は、私たちにどのようにして届いているのでしょうか。御声が聞いたなら、応えなければなりません。

② 神は戦われる(15)

人を惑わし神に背かせた者は欺く者(Ⅱコリント 2:11)です。神が創造された世界を罪によって破壊した敵対する者に、神は立ち向かわれます。確かに世界は変わりましたが、やがて女から生まれる者が、彼の頭を打ち砕くと約束されます。御子イエスとその御方です。

③ 神は覆われる(20-21)

妻に「生きる」の意の名をつけたのは、どんな思いからでしょう。神は彼らのために、いちじくの葉に替えて皮の衣を着せられ、裸を覆われました。そのために血が流されました。これは罪を犯した人への神からのメッセージです(ロマ 5:8)。

<おわりに> 神とその確かな言葉を疑い背くのは、今に至るまで続き、同時にその結果と影響が人の世界に今もなお及んでいます。しかし、神は負かされてはいません。諦めてもいません。あの日に宣告されたあわれみと救いを携えて、呼びかけられています。(H.M.)